

地域ニュース

痛み学入門講座

◆ 69 ◆

湿布薬を貼ろう

痛みの治療に医療用湿布薬が広く用いられており、私もよく処方している。このなかでも非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）を含んだ湿布薬が、最近のはやりだ。従来の局所を冷やす成分（「スリットする」メントールなど）に痛みを抑えるさまざまなNSAIDsを加えたものである。1930年にサリチル酸メチルを含んだものが発売され、84年以降はより強い効果を持つインドメタシンやケトプロフェン、ジクロフェナック、ロキソプロフェンなどを含む製剤が立て続けに発売された。

なお、湿布薬（パップとテープがある）以外にも、軟膏やクリーム、ローション、ゲルなど多くの種類があるが、いずれも口からの摂取や注射に比べて胃腸障害などの副作用は少ない。適応となる痛みは変形性関節症▽筋肉痛▽腰痛▽外傷後の痛み▽などではあるが、ケトプロフェン含有湿布薬は腰痛症や関節リウマチにも適応がある。30年以上も前のことになるが、私はオーストラリアで開催

非ステロイド性抗炎症薬

NSAIDs含有が人気

された「国際疼痛学会」で、このNSAIDs含有医療用湿布薬の効果についての発表を行ったことがある。サンプルにと持参した湿布薬はあつという間に品切れとなり、各国の医師から質問責めにあつた。まるで袋たたき状態である。何しろ他の国にはそもそも湿布の文化がない。たやすく説明できるものではないのだ。冷汗をかいた。トホホ……。

使用上の注意点としては、まず接触性皮膚炎（いわゆる「かぶれ」でかゆみや発赤、場合によっては水泡を作る）の予防である。

「4時間以上貼りっぱなしにするのはやめましょう、寝る前に貼って朝までダメです」と説明しているのだが、「刺がしてはまた新しく貼って、一日中貼ってるよ」とちらかす強者

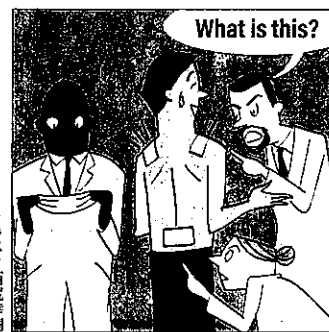


イラスト 西原幸輔



森本昌宏（もりもと・まさひろ）
大阪なんばクリニック（06・6648・8930）本部長・院長。平成元年、大阪医科大学大学院修了。同大講師などを経て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。31年4月から現職。日本ペインクリニック学会名誉会員。

もいる。貼付後4時間もすれば、含まれている成分は皮膚から十分に吸収されているので、長時間貼る必要はない。

また、ケトプロフェンを含んだ製剤では光線過敏症が問題となる。この場合、紫外線対策として服やサポーターで貼付部位を覆っておく必要がある。

少し脱線するが、あるおばあちゃんは狭心症のために処方されたニトログリセリンの貼付薬を何枚も膝に貼っていた。「痛い膝に貼ったら効くと思って……」というが、これは笑えない。ニトログリセリンが大量に体内に吸収されると重篤な低血圧を起こす。だから、絶対にしてはいけません。

NSAIDs含有医療用湿布薬は、薬局で買えば1枚約13〜140円、健康保険を用いた処方（3割負担）では約3・6〜16・5円程度になる。患者さんからは「薬局でこうたら高いやん。もっとくれたらええのに、ケチ〜」と言われる始末だが、健康保険の適応内で処方できる枚数にはおのずと限りがあります。上手に貼るようになってしまうか。

第1日曜日に掲載します。